

W・H・ベヴァリッジ『失業論』の思想的背景と失業調査

永嶋 信二郎

■ 要約

本論文は、まずベヴァリッジ『失業論』の社会保障思想における意義を考察するために、彼がそれを著す際に、イギリス経済・社会思想からどのような影響を受けたかを考察する。次に、彼が当時のイギリスにおける失業問題とどのようにかわり、彼の考えを形成したかについて検討することを通して、それが失業の実態とどのように関係し、実質的な意味を持っていたかについて考察する。

ベヴァリッジの『失業論』は、一つの思想から生じた理論でなくトインビーホールなどの慈善組織、ブースに代表される社会調査から生じた失業に関する考え、オールデンが提唱した失業対策をその一例とする新自由主義など、失業問題に対処しようとしたさまざまな考えから影響を受けて生まれた理論であると位置付けることができる。それを背景に彼は失業問題、特に臨時労働の現実を調査した結果、「不完全就労」が失業問題の中心であると認識して、『失業論』を形成することになった。

■ キーワード

『ベヴァリッジ報告』、『失業論』、イギリス経済・社会思想、失業調査

I 問題設定

1942年に発表された『社会保険及び関連サービス』（『ベヴァリッジ報告』）¹⁾はイギリス福祉国家および社会保障の最初のモデルとされて、これまではその観点から検討がなされてきた。しかし、近年になって、福祉国家の再編に向けて各国で社会保障改革が進み、福祉国家の構造とその展開に対する関心が高まる中で、既存の福祉国家の構造や社会保障の政策体系を把握することが求められていることから、『ベヴァリッジ報告』を新たな観点から検討することが必要となっている。

すなわち、イギリスという一国としての特殊性と歴史的特質を理解しながら、『ベヴァリッジ報告』を理解することが必要であり、また当報告の作成に大きな影響を与えたベヴァリッジの社会保障思

想を把握することが重要であると考え。ゆえに当報告をイギリス社会政策上に位置付け考察するために、彼の最初の著作である1909年に発表された『失業論』²⁾（以下『失業論』）を取り上げ、前記の観点から検討する必要がある。

ベヴァリッジは『失業論』の中で、失業の発生要因として、労働市場における調整の不完全を重視した³⁾。ロンドンの港湾労働市場を例に挙げて、他の地域・産業における雇用に関する状況がわからないために、労働市場が分断された状態になっていることに注目する。そのことによって“雇用と失業を繰り返す存在”である臨時労働者が発生し、労働市場が分断されていない状態より失業が増加することによって起こる失業⁴⁾、景気変動などによって引き起こされる循環的失業⁵⁾、個人の能力や就労意欲に問題があることなど個人的要因から

引き起こされる失業⁶⁾を指摘している。

彼はその対策として、第一は職業紹介所に雇用に関する情報を集め、紹介することによって分断された労働市場を一つにする「労働市場の組織化」⁷⁾、第二は、保険によって失業者の生活を経済的に保障する失業保険⁸⁾、第三は個人的要因からもたらされる失業に対応して改正された救貧法⁹⁾を挙げた。代表的な失業対策としては、以上の三つが挙げられる。

さて、これまでの『失業論』に関する研究についていえば、それがイギリス社会政策史の中で、どのように生成されたのかを検討していないといつてよい。井垣の研究¹⁰⁾では、その点に関する指摘はしているが、分析は行われていない。

藤井の研究は、『失業論』の形成過程をベヴァリッジの考えがその形成に至るまでどのように変化したかを変化した内容に応じて各段階に分けて詳細に検討しており、以上の課題を取り上げた唯一の研究であると位置付けられる¹¹⁾。しかしベヴァリッジの考えがなぜ変化したのか、その変化をもたらした背景や要因は何か、という論点については検討されていない。そのため、それがなぜ生じたか、何がその形成に影響を及ぼしたのかが明らかにされていないのである。その点が解明されなければ、『失業論』がどのようにして生まれたのか、そしてそれが生成した意義は何かについてとらえることができない。

以上の研究状況を俯瞰すると、これまで『失業論』が形成された背景や影響を及ぼした要因は何かについての検討は行われていないといえる。

本稿は、『失業論』をイギリス社会政策上に位置付ける研究の一環として、以下の課題に取り組むこととする。まずベヴァリッジがそれを著す際に、イギリス経済・社会思想からどのような影響を受けたかについて検討し、それによってその思想的背景が何かを明らかにする。次に彼がイギリス失業問題とどのようにかわり、『失業論』を構築したか

を検討し、それにより、彼の考えがイギリスの失業の実態とどのように関係していたかを考察する。

II W・H・ベヴァリッジ『失業論』の思想的背景

1 1900年代におけるベヴァリッジの社会政策像

ベヴァリッジは1905年から08年においてモーニング・ポストで主筆を務めていたときに、社会政策を取り巻く諸問題に関心を持ち、社会問題について論ずることになる¹²⁾。

その中からベヴァリッジは、自身の社会政策論を構築することになった。当時における彼の社会政策論を構成する基本的な概念は、「貧困」と「労働」である。彼は、貧困は個人で対処できないものであるために、社会改革の最優先課題はその解消にあると考え、貧困に陥っている人々はいかなる状態にあるのか、そして貧困がなぜ発生するのかについて考察を行った結果、政府が貧困に対処すべきであると考えに至った¹³⁾。しかし同時に彼は、ある程度経済的に不平等が存在している状態の方が経済にとって有益であるために、不平等を解消することによって人々が貯蓄に励み労働に勤しむことを妨げるような事態は避けるべきであると指摘した¹⁴⁾。

彼は労働をすることは重要なことであり、社会生活を営む上でそれは義務であると位置付けたが、人間は利己的な考えを持っているために労働を避ける傾向にあることから、労働をすることによって得られる賃金額が貧困を救済する制度から得られる額よりも高く設定されるべきであると主張した。ただ彼は、人々は余暇を過ごすために生活をしていると考えて、労働は美德ではないと位置付けている¹⁵⁾。

その上で彼は社会政策によって社会が「組織化される」ことを目指した。つまり彼は政府が生活の必要性を把握した上で、生活の最低水準を設定することによって、社会に存在する非効率な部分を

社会から除去する一方で、市民に各社会組織の活動に積極的に参加することを促すことによって、政府がすべての階級や権力を社会に統合することを想定したものである¹⁶⁾。

またベヴァリッジはこの時期に社会保険論も構想することになる。彼は当初、社会保険における拠出制は個人を統制することになるため、イギリスには合わない制度であると批判した。しかし彼は、無拠出制では財政が逼迫すること、資力調査は人々に節約をする意欲を失わせ偽って給付を得ることを助長する結果となると前々から考えていたことから、拠出制を採用するドイツの社会保険を支持する立場に転換した。彼はドイツの社会保険が資力調査を行わず、その上すべての労働者に対して受給資格を与えるために、個人に恥辱感を与えず、貯蓄する意欲を減退させないで貧困を救済できる点、生活を営む上での経済的な必要性に対応する点、階級間、国家と階級間の連帯を促進する点を根拠に、それを支持することになる¹⁷⁾。

2 W・H・ベヴァリッジとトインビーホール

トインビーホールは1884年にサミュエル・バーネットによって設立された慈善団体であり、セツルメント運動における最初の拠点と言われるものである。そこでは、長期にわたって解消されない貧困があることを人々に認識させる役割を果たし、その上教育、慈善、社会調査の面に関しても中心的な役割を担うことになった。またそこに入所して貧民地区を訪れることによって貧困を目の当たりにした若者達が後に政治的に影響力のある地位に就くと、貧民が陥っている状態を改善するために議会や行政を通じて活動することになった。彼らは、セツルメント運動の経験から貧困によって人々が政府に対して反感を持つ結果となることも同時に感じて、その上健康や雇用、退職、児童福祉にかかわる責任を個人に課してはならないと考えるに至ることとなる¹⁸⁾。

当時その館長であったバーネットは、社会問題が個人的な要因から生じるものではないためにその解消を図ろうとして社会改革を推進していた人々に影響を与え、その実現を目指した運動において中心的な役割を担う存在であった。しかし当初トインビーホールの価値観は上流階級のそれを反映した保守的なものであって、バーネット自身も社会問題は個人的な要因から発生すると考えていた¹⁹⁾。

その後1900年頃に彼は、トインビーホールでの経験から窮乏を引き起こす経済的な要因に関心を持つことによって、老齢年金や失業者に対処する施策といった政策に対して関心を抱くことになった。同時にこの時期にトインビーホールの思想が、政府が社会問題に対処すべきであるとの立場をとる運動から批判を受けたことから、彼はトインビーホールが社会調査を行うことによって、社会改革への指針を示そうと考えることになる²⁰⁾。

彼は、臨時労働として現れる失業は労働者が過剰に存在する状態になっていることから生じているのであって、そのことによって経済が損害を受けていると考えた。そのためにバーネットは失業対策として失業している人々を救済することよりも、彼らを雇用に適合しない人々から区別することを提唱した。また彼は失業している労働者の多くが本当に職を見つけれないために、彼らに対しては寛大な措置を行う一方で、職を探そうとしない人々に対しては刑罰を課して、拘留させる措置を施すべきであることを主張する²¹⁾。

1903年11月からバーネットは失業者を救済するために、彼らを特定の地域に集めて就労させるというコロニー制度を用いた施策を打ち出し、さらに困窮を救済するために休眠中であったマンション・ハウス委員会を復活させた²²⁾。

ベヴァリッジは1903年にバーネットの要請を受けてトインビーホールに入所し、副館長に就任した。バーネットはベヴァリッジをそこでの新たな役割を

担う存在、加えて自らの助手として位置付けて採用することになった²³⁾。

3 W・H・ベヴァリッジ『失業論』の理論的背景

1904年の終わりから05年初頭にかけて、ベヴァリッジは『失業論』における理論的基盤を獲得することになる²⁴⁾。

チャールズ・ブースは1893年に開かれた「労働に関する王立委員会」で、川岸で行われている臨時労働で発生している諸問題に対処するために、職業紹介所制度を確立するべきであると提案した。このことを知ったベヴァリッジは、この提案を港湾労働だけではなく、他の産業にもあてはめようと考えたこととなる。またブースは1895年に行われた「雇用の不足による窮乏に関する特別委員会」においても、ロンドン港周辺にある川岸で事業を行っている数千にも及ぶ雇主が、労働者の不足する事態に備えて臨時労働者を活用している結果、非正規労働者が必要以上に存在することになっていると証言している。彼はその対策として臨時労働者を「非臨時化」することによって正規労働者にするか、または正規労働者として雇用される場所を求めて移動させるべきであると主張した²⁵⁾。

ベヴァリッジは、パーシー・オールデンの著作 *The Unemployed* から失業対策を学ぶことになる。その中でオールデンは、失業対策として重要なものとして失業保険と雇用に関する情報を登録して人々に公表する機関である職業紹介所を取り上げた²⁶⁾。

彼は、職業紹介所で雇用を巡って労働者と雇主が出会うことになるために、職を探している人々はそこで職がある場所を見つけられること、また雇主は企業にとって最も適した人を発見できることから、職業紹介所が失業対策として有効な施策であると考えた。またオールデンはドイツの職業紹介所に関する事例を研究した中から、その中でも労働者と雇主がともに参加する委員会が運営して、

公共機関が管轄する雇用の情報を登録するものを最も重要視した²⁷⁾。

彼は失業保険に関しては、労働組合による制度しか存在しないイギリスに適合した制度として、ベルギーやフランスに存在する労働組合が運営する失業保険に政府が補助する制度を取り上げた。彼はそれが導入されることで労働者が失業保険に関心を持つことになることによって、結果的にそれがさまざまな労働組合に普及していくことになると想定した²⁸⁾。

ベヴァリッジの『失業論』に影響を及ぼした思想を考察すると、ベヴァリッジの『失業論』の背後には、社会問題全般を取り扱う彼の社会政策に関する考えがあったことがわかる。彼が構想した社会政策は、労働を重視しながらも貧困を解消することによって、人々を社会に統合することを目指すものであった。彼は当初、拠出制は個人を統制することになると考えたために、社会保険に対しては批判的な立場をとっていた。しかし後に彼は拠出制がすべての労働者を対象にした上で、人々に恥辱感を与えずに貧困から救済すること、またそれを通して人々の間に連帯関係を醸成すると考えて、支持に転ずることになった。

ベヴァリッジはトインビーホールに入所して失業問題に触れることになる。トインビーホールの館長であったバーネットは、臨時労働として現れる失業は経済的に損失をもたらすものであり、その上その状態にある失業者は本当に職を探している人達であると考えたために、彼らに対して失業対策を行うべきであると主張した。このような考えの下で、ベヴァリッジは失業問題に取り組むことになる。

彼の『失業論』を支える理論的基盤は、ブースが主張した失業に関する考えとオールデンが唱えた失業対策論にある。ブースは港湾で行われている臨時労働に注目して、職業紹介所が設置されることによって失業者は雇用のある場所に移動することができるために、臨時労働という形で現れる失

業に対処することができる」と主張した。またオールデンは、職業紹介所は雇用を巡って労働者と雇主が出会うことによって失業に対処する機関であると位置付けた。また彼は失業保険を張り巡らすための措置もそこで提示することになった。

III 失業調査とW・H・ベヴァリッジの『失業論』

ベヴァリッジは自らを社会的な要因から社会問題が発生すると考える立場に位置付け、社会問題を科学的に見る見方を研ぎ澄ますためにトインビーホールに入所したのであるが、入所当時失業問題については何も知らなかった。ただ彼は、失業問題が社会問題の一環としてのものであるとらえているにすぎなかった²⁹⁾。

1903年12月に、ベヴァリッジはバーネットが設立したマンション・ハウス委員会の委員に選出された。ベヴァリッジはバーネットのその計画を推進する役割を担うとともに、ロンドンの港湾で発生している失業について調査をした。ベヴァリッジはそこには2ヶ月しかいなかったが、多くのことを学んだ。彼はテムズ川の下流にある港湾を対象に、救済を申請する失業者に彼らの状況について聞き、そして失業者を以前雇っていた雇主から彼らのことについて聞き取り調査を行うことによって、そこにおける失業の実態を調べた。またベヴァリッジはマンション・ハウス救済基金を運営していくために、申請の中から援助が必要な人々を選び出した。以上の経験から、彼は当時の主要な経済問題について学び、失業者がその救済基金に援助を求める理由は何かを解明しようとした³⁰⁾。

またベヴァリッジは、トインビーホールによって援助を受けた人々が援助を受けた後2-3ヶ月たってどのような状況になっているかを調査した。その調査によって彼は、援助を受けた人々が援助する前と同様に正規労働に就かず失業したままの状態であり、貧困にあえぎ僅かな収入で暮らしてい

たことを見つけ出した。また彼は慈善活動を行う人々からうそをついて金を騙し取ることを生業とする人々にも出会った。その状況からベヴァリッジは、労働需要がなければなぜ雇用のある所に移動しないのか、さもなければなぜ食料に飢えて挙句の果てに死んだりしないのかを考えた結果、場当たりの慈善は失業者に「尊敬に値しない」生活様式で暮らす結果となるために政府が失業者の救済に乗り出すべきであると確信した³¹⁾。

1904年には『トインビーレコード』に論文が掲載され、彼の失業に関する視点がそこで示されることになった。そこで彼は失業を考える際に、景気変動によって失業した場合に失業者の労働に関する能力をその間にいかに維持するかが肝心であると主張することになる³²⁾。

彼は1905年春に、臨時雇用について明らかにするために慈善組織協会が設立した「不熟練労働者に関する委員会」の書記に任命される。その調査の中心は、ロンドンにある港湾で働く労働者の雇用形態に置かれ、雇主に質問状を送って事実を蒐集することによって、その実態を明らかにしようとした³³⁾。

その結果からベヴァリッジは、失業が社会的な窮乏や個人の性格に関する問題ではなく、産業の動向から生ずる問題であることに気づくことになる。彼は失業を三つの型に分類する。第一にある特定の産業が衰退すること、または技術革新が起こることによって、労働者が労働需要に比べて過剰になることによって発生する失業が挙げられる。次に労働需要が季節的に、または循環的に変動することによって起こる一時的な失業がある。中でも彼が最も重視した失業の類型は、雇主が職に関する情報を提供し、労働者がそれを選択する機会が欠けているために起こる、臨時労働に関する労働市場で現れて、長期的に存在する「不完全就労」である。ベヴァリッジはその失業に陥っている失業者は、以前より劣悪な労働条件にある労働に従事す

るように絶えず圧力をかけられると考えて、以前から指摘されていた失業者自身に労働する上で必要な技術がなく、節度ある生活をせず、道徳面で問題がある点よりも重要なことであると指摘した³⁴⁾。

そこで彼は「不完全就労」を廃止することが、失業に対処する際に最優先に取り組むべき課題であると考えた。彼はブースが提唱した非臨時化の視点とオールデンが主張した職業紹介所に関する考えを組み合わせ、「不完全就労」に対処しようとした。すなわち、職業紹介所が失業者に正規の雇用形態で行われている職業に関する情報を提供することによって、臨時労働の解消が図られるであろうと主張した。また彼は有能貧民に対して積極的に救済するように救貧法を改革し、その上彼ら自身に根ざす問題点を改善するように対応することも想定していた³⁵⁾。

以上の経過について考察すると、ベヴァリッジは失業調査によって失業者の実態について知ることになったことがわかる。彼は、慈善活動による援助を失業者に行ってもその効果はなく、失業者が依然として正規労働に就くことなく、失業と貧困に陥ったままの生活をしていることを認識した。そのことから彼は政府が失業対策を行う必要性を認識して、その上失業問題の中でも臨時労働が特に問題であることと見え、臨時労働の廃止を失業対策の中心的な目標に定めることになった。

IV 結語

ベヴァリッジの『失業論』は理念的な背景として、社会政策像を持っていた。つまりその中に労働を重視し、貧困を解決することによって人々を社会に統合する社会政策が背景にあり、社会保険もその手段として彼の考えの中にあっただ。彼はトインビーホールを通して失業問題に触れることになった。彼はブースの議論から臨時労働を発見し、職業紹介所によってそれに対処することを学んだ。

そして彼は失業調査を通して慈善活動を行っても、失業者が失業と貧困の中にある生活状態を解消できないと考えた。そこで政府が失業対策を行うべきであり、中でも臨時労働の問題を重視して取り組むべきであると考えてに至った。

19世紀末にイギリスで失業問題が発生して、その中からイギリス経済・社会思想から、従来の自由放任で対処する発想ではなく、国家介入によって貧困・失業問題等社会問題に対処する傾向が出てきた。トインビーホールなどの慈善組織、ブースに代表される社会調査から生じた失業に関する考え、オールデンが提唱した失業対策をその一例とする新自由主義などの思想はその中に位置付けられる。ベヴァリッジは、そのそれぞれから影響を受け、『失業論』を著したのである。すなわち、それは一つの思想から生じた理論ではなく、失業問題に対処しようとしたさまざまな考えから影響を受けて生まれた理論であると位置付けられる。それを背景に彼は失業問題、特に臨時労働の現実を調査して、『失業論』を形成した。

『失業論』を当時のイギリス社会政策史との関係で検討するためには、失業労働者法、救貧法王立委員会などイギリス失業対策の展開との関係を検討する課題が残っている。またベヴァリッジが接触したイギリス失業問題の全体像を解明することも必要である。

投稿受理(平成16年8月)

採用決定(平成17年2月)

注

- 1) *Social Insurance and Allied Services, Report by Sir William Beveridge, Presented To Parliament by Command of His Majesty, His Majesty's Stationary Office, Cmd.6404, 1942.* (山田雄三監訳『ベヴァリッジ報告 社会保険及び関連サービス』至誠堂, 1969年)
- 2) Beveridge, W. H., *Unemployment: A Problem of Industry*, Longmans, Green and Co., 1909.
- 3) *Ibid.*, pp.4-14.
- 4) *Ibid.*, pp.69-107.

- 5) *Ibid.*, pp.41-67.
- 6) *Ibid.*, pp.111-148.
- 7) *Ibid.*, pp.192-217.
- 8) *Ibid.*, pp.219-230.
- 9) *Ibid.*, p.215, p.230.
- 10) 井垣章二「ラウンタリーとベヴァリッジ」『評論社会科学』第18号(1980年8月)。
- 11) 藤井透「ベヴァリッジ『失業』の成立」『商学論集』第57巻, 第1号(1988年8月)。
- 12) cf. Harris, Jose, *The Social Thought of William Beveridge*, *Bulletin. Society for the Study of Labour History*, No.31, 1975, p.9; Harris, Jose, *William Beveridge: A Biography*, Clarendon Press, 1977, p.85, pp.96-97.
- 13) cf. Harris, *loc. cit.*, p.9; Harris, *op. cit.*, pp.96-97.
- 14) cf. Harris, *loc. cit.*, p.9; Harris, *op. cit.*, pp.98-99; Meacham, Standish, *Toynbee Hall and Social Reform 1880-1914: the Search for Community*, Yale University Press, 1987, pp.146-147.
- 15) *Ibid.*, pp.102-103.
- 16) Harris, *loc. cit.*, p.9; Harris, *op. cit.*, pp.99-102; Hennock, E. P., *British Social Reform and German Precedent: the Case of Social Insurance*, Clarendon Press, 1987, pp.134-136.
- 17) Gilbert, Bentley. B., *The Evolution of National Insurance in Great Britain: the Origins of the Welfare State*, Michael Joseph, 1966, p.42, p.44.
- 18) Harris, *op. cit.*, p.45.
- 19) cf. Harris, *op. cit.*, p.46; Meacham, *op. cit.*, pp.x-xi.
- 20) cf. Lord Beveridge, *Power and Influence: An Autobiography*, Hodder and Stoughton, 1953, p.23 (伊部英男訳『ベヴァリッジ回顧録 強制と説得』至誠堂, 1975年 28頁); Harris, *op. cit.*, p.47; Briggs, Asa and Macartney, Anne, *Toynbee Hall: the first Hundred Years*, Routledge & Kegan Paul, 1984.
- 21) cf. Lord Beveridge, *op. cit.*, p.23 (邦訳書 28頁); Harris, *op. cit.*, p.112; Briggs, Asa and Macartney, Anne, *Toynbee Hall: the first Hundred Years*, Routledge & Kegan Paul, 1984.
- 22) Harris, *op. cit.*, p.48.
- 23) *Ibid.*, p.116.
- 24) cf. *Ibid.*, p.116; Briggs and Macartney, *op. cit.*, p.67.
- 25) cf. Harris, *op. cit.*, p.116; Briggs and Macartney, *op. cit.*, p.67.
- 26) Harris, *op. cit.*, p.116.
- 27) Alden, Percy, *The Unemployed: A National Question*, P. S. King, 1905. pp.48-53.
- 28) *Ibid.*, pp.58-64.
- 29) Harris, *op. cit.*, p.48; Briggs and Macartney, *op. cit.*, p.61.
- 30) cf. Lord Beveridge *op. cit.*, p.23 (邦訳書 28-29頁); Beveridge, Janet, *Beveridge and His Plan*, Hodder and Stoughton, 1954, pp.52-53.
- 31) Lord Beveridge, *op. cit.*, p.24, p.26. (邦訳書 29頁, 33頁)。
- 32) cf. Harris, *op. cit.*, pp.115-116.
- 33) Lord Beveridge, *op. cit.*, p.32 (邦訳書 41頁): Harris, *op. cit.*, p.117.
- 34) *Ibid.*, p. 118.
- 35) *Ibid.*, p. 118.

参考文献

- Alden, Percy. 1905. *The Unemployed: A National Question*, P. S. King.
- Beveridge, Janet. 1954. *Beveridge and His Plan*, Hodder and Stoughton.
- Beveridge, W. H. 1909. *Unemployment: A Problem of Industry*, Longmans.
1942. *Social Insurance and Allied Services, Report by Sir William Beveridge, Presented to Parliament by Command of His Majesty*, His Majesty's Stationary Office, Cmd.6404. (山田雄三監訳 1969『ベヴァリッジ報告 社会保険及び関連サービス』至誠堂)
- Lord Beveridge. 1953. *Power and Influence: An Autobiography*, Hodder and Stoughton. (伊部英男訳 1975『ベヴァリッジ回顧録 強制と説得』至誠堂)
- Briggs, Asa, and Macartney, Anne. 1984. *Toynbee Hall: The First Hundred Years*, Routledge & Kegan Paul.
- Gilbert, Bentley B. 1966. *The Evolution of National Insurance in Great Britain: the Origins of the Welfare State*, Michael Joseph.
- Harris, Jose. 1975. *The Social Thought of William Beveridge*, *Bulletin. Society for the Study of Labour History*, No. 31.
- Harris, Jose. 1977. *William Beveridge: A Biography*, Clarendon Press.
- Hennock, E. P. 1987. *British Social Reform and German Precedent: the case of Social Insurance 1880-1914*, Clarendon Press.
- Meacham, Standish. 1987. *Toynbee Hall and Social Reform 1880-1914: the Search for Community*, Yale University Press.
- 井垣章二 1980年8月「ラウンタリーとベヴァリッジ」『評論社会科学』第18号
- 藤井透 1988年8月「ベヴァリッジ『失業』の成立」『商学論集』第57巻 第1号
- (ながしま・しんじろう 東京海洋大学非常勤講師)